

9 (気象学会シンポジウム；アンケート)

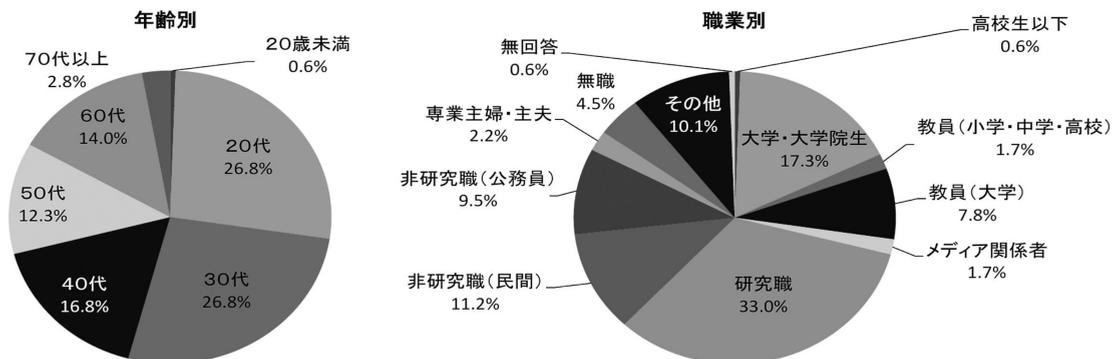
4. アンケート結果と分析

小 玉 知 央*

シンポジウムの参加者を対象に、紙およびwebによるアンケートを実施した。有効回答数は紙が147名、webが32名であった。web回答者にはオンライン参加者も含まれることを考慮すると、回答者は会場参加者約400名の半数弱程度である。以下ではアンケート

を集計・分析した結果の概要について紹介する。アンケートの全文および結果の詳細は <http://goo.gl/N47eOt> を参照されたい。

アンケートに回答頂いた方々の気象学会員および非気象学会員の割合はおよそ3：2であった。年齢層



第1図 アンケート回答者の属性。全回答者（179名）に占める割合。

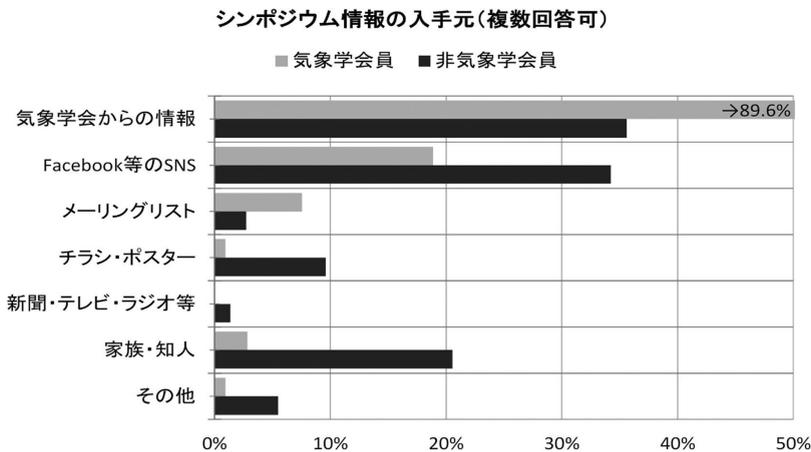
* 海洋研究開発機構, kodamac@jamstec.go.jp

(第1図左)は20代と30代で半分強を占めたが、60代まで比較的満遍なく広がっている。回答者の職業(第1図右)は研究職と学生でおよそ半数を占めているが、民間企業(非研究職)が約1割を占めている点が印象的である。また、初めてシンポジウムに参加した回答者がおよそ4割を占めていた(図省略)。

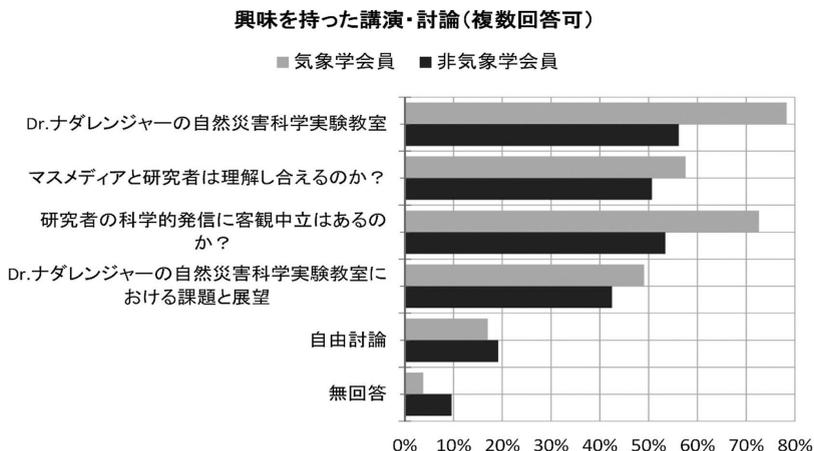
このようにコアな気象学会員だけでなく多様な参加者が集結した背景としては、気象学会が通常発信する情報に加え、Facebook等のSNS(Social Networking Service)や口コミの効果が大きかったようである(第2図)。チラシ・ポスターも非気象学会員を集客する上である程度効果があった。参加者の多くはタ

イトル・内容を見て参加を決めているが、仕事との関連やSNSでの勧誘も参加の動機付けとなった(図省略)。これらの結果は今後の公開イベントにおける一般参加者の集客のヒントになりそうである。

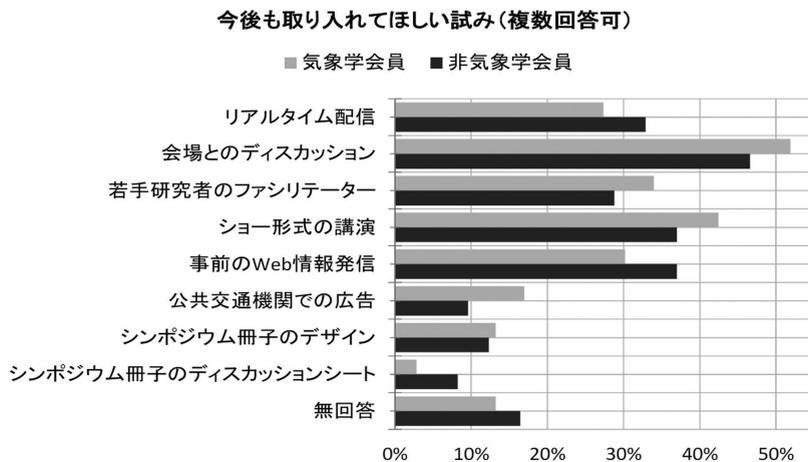
前半の3講演については、学会員かどうかに関わらず半数以上の方に興味を持って頂いた(第3図)。特に気象学会員の関心度が高く、これまでとは趣が異なる本シンポジウムを新鮮に感じて頂けたのかもしれない。一方、後半のプログラムでは参加者の興味が低下した。アンケートの自由記述では、プログラム編成上の問題点(納口氏とDr.ナダレンジャーで2回やる必要があったのか、時間管理が悪い、等)や自由討論に



第2図 シンポジウム情報の入手元(複数回答可)。気象学会員(106名)、非気象学会員(73名)それぞれの回答者に対する割合(以降の図も同様)。



第3図 興味を持った講演・討論(複数回答可)。



第4図 今後のシンポジウムでも取り入れてほしい試み(複数回答可)。

における問題点(ファシリテーターのコントロール不足、議論の焦点の不明瞭さ、等)をご指摘頂いた。これらはファシリテーターにとって反省点である。

今回のシンポジウムでは、これまで気象学会では行ったことがない野心的な試みを多数行った。今後も取り入れるべき試みとしては、会場とのディスカッション、ショー形式の講演、事前のweb情報発信、若手研究者のファシリテーター、リアルタイム配信、を挙げる声が比較的多かった(第4図)。ショー形式の継続は現実的には難しそうだが、それ以外は比較的行いやすい試みである。一方、公共交通機関への広告やシンポジウム冊子の斬新なデザインについてはあまり支持が広がらなかった。他の設問でシンポジウム冊子の内容について尋ねたところ、分かりづらいという回答はごくわずか(1%)で、多くの方(76%)から分かりやすいという声を頂いた。素晴らしい原稿を寄

せてくださった講演者の方々に感謝したい。

シンポジウム全体の満足度を5段階で評価して頂いたところ、85%の方から満足又はやや満足という評価であった。前述のように至らない点も数多くあったが、野心的な取り組みを多く取り入れつつ全体としてスムーズな進行ができたことを評価されたものと受け止め、ファシリテーターとしては素直に喜ぶたい。少数ではあるものの、ファシリテーターの力量不足や会場の不備、内容が難しい、一般公開なのに研究者向けである、といった厳しいご意見を頂いたことも付け加えておく。継続的な分析と改善のため、今後の一般公開シンポジウムでもアンケートを行って参加者の期待に答えていくことが望ましいと考えている。

最後に、多くの参加者の皆様にアンケートへご協力頂いたことをファシリテーター一同、感謝いたします。